

# 海軍

## フィリピン ミンダナオ島敗走記

佐賀県 湖上熊一

大村海軍航空廠の技術員として教育を受けておりましたが、昭和十九年四月八日佐世保海兵団に予備練習生として入団、七月二十日新兵教育を終り上等兵を命ぜられる。八月盆過ぎ、三重県の鈴鹿航空隊より当時の一式陸攻にて鹿屋、沖繩、高雄、マニラと一個所に四、五日滞在してマニラに着いたところ同期生の練習生がバシー海峡で敵の潜水艦にやられ、何人か生き残っていると聞きマニラの陸軍病院へ行った。百三十余名のうち助かった十三名がベットに寝ていた。

私はまだ南のミンダナオ島へ行くといつて、またの再会を約束して別れたが、その後は会うことはできなかった。それからラブアン島、ミンダナオ島ザンボアンガ南菲空七六一航空隊。日本軍が上陸する前は米軍の飛行場もあつて、日本軍の飛行場が二箇所あつた。

二十年二月上旬に兵舎は敵の空襲により壊わされ、防空壕暮らしとなり、二月下旬いよいよ敵艦隊約十二隻がきた。ミンダナオ島は九州よりやや大きい島で、私達がいたところは九州でいえば鹿児島県串木野市の位置ではないかと思う。陸軍部隊が鹿児島市内というところ。復員後分かったので敵の艦船は大小百二十余隻だつたそうです。

三週間あまり頑張つて、朝、目が覚めると、ああ今朝まで生きていたのか、今日まで命がと、山の上から

見える敵の艦船がうらめしかった。米軍のものすごい物量におされ、二十四日ぐらいだったと思う。総員突撃玉砕というときにマニラの山下大将より玉砕はまったく総員後退し、ダバオに行けという無線が入り、後退することになった。陸軍の旅団、徴用軍事工員、海軍の警備隊、私達の航空隊が最後でした。数は数万人はいたと思います。

一番困ったのは足をやられた兵隊たちで、山のジャングルの中を連れていくことはできぬ、足をやられた兵隊は皆置き去りです。

佐賀県出身の体格のよい下士官が足のふくらはぎを破片でやられ連れて行かれるところまでは連れていきましたが、本人も傷が痛むとみえ一夜のうちにほの肉はげっそりとなり、殺してくれと頼むのですが、みすみす殺すということはできない。小銃と数発の弾を残して山のジャングルを進みました。残される者のさびしげな顔が現在でも頭に焼き付いて離れません。

後退するときは米約二升、塩少々、小銃弾数十発、手榴弾二、三発、小銃一丁、これだけ身に着けただけ

で重いのに、道なきジャングルを蛮刀や日本刀で樹木やカズラを切倒し人の通れるような道を作り進むのです。道なきジャングルの密林、上に登るかと思うと下ったり、全く方角も分らない行軍で、小銃の弾の弾帯が腰骨に食い込んで赤く張れ上がり、小銃の弾をこっそりと捨てる者もいた。米のある間は落後者もできなかったが、肩とか腕の負傷兵等が落後者ようになった。隊を離れることは死を意味するもので、負傷兵も精一杯の力で付いてくるのですが、しかたがない。

いよいよ雑糞に米がないようになってきた。一日中ジャングルのなかを上へ下へと歩いて、夕刻水の有るところに駐屯して、天気の良い日はあまり骨折らずに火は燃えるが、雨の日はなかなか火は燃えぬ。生木を倒し、小さく割って、これを組んで積み重ね、交替で吹いて火力の出たところで雑炊作りです。これから一時間あまり、食べるのは十時、十一時ごろ、その雑炊も腹いっぱい食べることはできない。

米がないようになってからは、体力のない者、三十五、六歳以上の兵隊がバタバタ倒れる。これではいか

ぬと少し海岸沿いに出て、島民が作っている芋畑を探すことになった。しかし一日二日では芋畑に行き着かぬ。一日中ジャングルのなかを歩いて、谷川の水だけで過ごし、朝起きてみると、皆顔の肉がげっそりとなり、目は三角になってくぼみ、肋骨が洗濯板のようにでている。このへんから先に出発した日本軍の白骨が至る所にごろごろしていた。

初めは私たちも分からずにおったが、米軍と島民が芋畑、砂糖きび畑等日本軍が食糧として取りに来るのを知って、壕を掘り、昼間、銃を構えて待っている。それを知らずに行くと機銃を乱射される。それから食糧を取るときは昼間はジャングルにひそみ、夜間に手探りで掘っていた。三月下旬ころより日本の梅雨期のように毎日雨が降り、四、五十日ぐらいは降つたでしょう。マッチも坊主がいかれ、使用できず。枯れ椰子の皮で編んだ火縄を持って歩くか、鉄兜に灰と火をいれ、消し炭まで持ち歩いてた。

負傷した兵隊は傷口にウジが湧き、腐敗しているの  
で、傍によると異様な匂いがする。それからジャング

ルのなかには血を吸うヒルがいる。枯れ葉の上に垂直に立っていて、ひとがとおるとあしにペタリと付いて血を吸う。夜野宿して雨にうたれて寝ると朝に目が覚めてみれば首筋は血だらけになっている。足首から下は現在でも当時のヒルに血を吸われた跡が残っている。毎日の雨で足はただれ、軍靴は山の上り下りで破れ、足は素足。足先がただれているので何かちよっとでもさわると飛び上がるほどに痛くて歩けない。私もいよいよ駄目かと思つた。

部隊といつても三十人ぐらいの少数な人員になっていて、他の人も私と同様足がただれ歩けない人間ばかりになっていた。点々とある島民の家に夜間は寝泊まりするようになった。夜、島民のハウスに手探りで着き、銃を片手にごろりと横になると背中になにか堅いものがあたる。朝になって良く見ると日本兵の白骨および頭蓋骨です。ここまでたどり着いて敵に攻撃されて、病死か餓死か、ほとんどのハウスに三、四体ぐらいの白骨はざらであつた。

また、風土病で私の左足は膝から下は腐敗して白い

骨が出ていた。薬もないので谷川の水で洗うだけ。このころはまたシラミが湧いて襦袢、ズボンと裏返してみると、シラミの卵が何千と付いていた。七月に入ると人数は十二、三名になった。谷川の水のないところを石ずたいに歩いていたら敵の速射を受け一人の兵隊が死んだ。

ここで責任者の小隊長は団体行動の気力を無くして北上を続けるものと、自由行動に出る者とに分けることに話を決めた。私は海水を腹いっぱい飲んで死んでもよいと思い、皆と分かれることになった。その時北上を続けた兵隊とはその後会っていない。どのぐらい歩いて海岸に出たか記憶にないが、とにかく敵に気を配り警戒しつつ海岸に出て、約一町歩余りの椰子林があり、この椰子林がその後十月末まで私の命をつないでくれました。

十月十四、五日ごろ島民の小銃で私は右横腹を撃たれたが幸い手で抜き取ることができた。月末には日本兵がきて、日本は八月十五日で敗戦となり、戦争は終わっているから、降伏すれば米軍は東京に送るといつ

て誘いにきたので、銃を捨てて降伏、シブコに連れられていかれた。

ザンボアンガ、レイテ島タクロバンの収容所は数百人の日本兵が収容されていた。私は傷口がまだ良くなくていなかったので、使役にもせず、年内に内地に帰ることとなった。米軍からは毛布やタオル、靴、服、水筒等を貰い、貨物船ではあったがレイテ島より二十年十二月二十四日、浦賀に上陸した。

台湾沖近くまでは夜は上甲板で寝てきました。静岡沖を北上したときは富士山が見え、皆涙を流していた。ミンダナオ島には数万体の日本兵の白骨が野ざらしであることは、現在の人々は知らない。復員当時十九歳でした。

合 掌